

2 「学びに向かう力、人間性等」に関すること

(1) 「自己肯定感」×「教科正答率」

調査結果のポイント

教科正答率（小学校は4教科合計，中学校は5教科合計）と児童生徒質問調査のクロス集計について

【自己肯定（自己受容）】

質問項目「自分にはよいところがあると思いますか。」（図40）

【他者信頼（自己受容）】

質問項目「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。」（図41）

【自己効力（粘り強さ）】

質問項目「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしていますか。」（図42）

【自己効力（挑戦心）】

質問項目「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦していますか。」（図43）

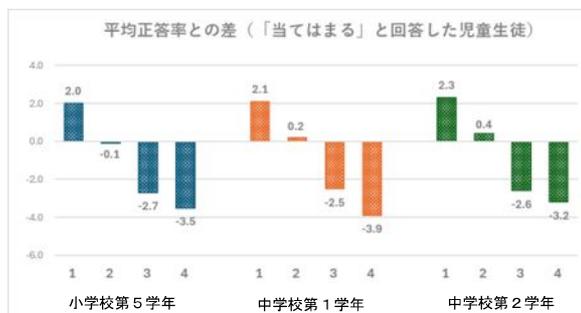
- 「自分にはよいところがあると思う」（自己肯定）及び「先生は自分のよいところを認めてくれていると思う」（他者信頼）の項目において、「当てはまる」と肯定的に回答した児童生徒は、教科正答率が相対的に高い傾向が見られます。このことから、自分自身を肯定的に捉えていることや、教師から認められているという実感をもっていることが、学習への安心感や意欲につながり、学習内容の理解を支えている可能性が考えられます。
- 「自分でやると決めたことをやりとげている」（粘り強さ）の項目では、「当てはまる」と回答した群と「当てはまらない」と回答した群との間で、教科正答率の差が明確に表れています。課題に粘り強く取り組む姿勢が、学習内容の理解や定着とより直接的に結び付いている可能性が考えられます。
- 「難しいことでも失敗をおそれず挑戦している」（挑戦心）の項目では、自己評価と学習成果との間に、単純な正の相関が成立していない可能性が考えられます。強肯定的に回答した群には、挑戦そのものを前向きに捉えている一方で、学習内容の理解や定着に十分結び付いていないケースが含まれている可能性があります。一方、「当てはまらない」と回答した群では、失敗への不安等から困難な課題への取組を避ける傾向が、学習成果に影響していることが考えられます。

【図40】 「自己肯定（自己受容）」と「平均正答率」のクロス集計
【自己肯定（自己受容）】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	38.4	55.0	2.0
2	どちらかといえば当てはまる	41.5	52.9	-0.1
3	どちらかといえば当てはまらない	13.6	50.3	-2.7
4	当てはまらない	6.2	49.5	-3.5

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	33.6	55.8	2.1
2	どちらかといえば当てはまる	43.9	53.9	0.2
3	どちらかといえば当てはまらない	15.5	55.1	-2.5
4	当てはまらない	6.8	49.7	-3.9

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	32.9	50.7	2.3
2	どちらかといえば当てはまる	45.1	48.8	0.4
3	どちらかといえば当てはまらない	15.6	45.9	-2.6
4	当てはまらない	6.2	45.2	-3.2



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

【図 41】 「他者信頼（自己受容）」と「平均正答率」のクロス集計
【他者信頼（自己受容）】

No.	小学校第 5 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	52.1	54.8	1.8
2	どちらかといえば当てはまる	36.9	52.3	-0.7
3	どちらかといえば当てはまらない	7.7	48.6	-4.4
4	当てはまらない	2.9	47.0	-6.0

No.	中学校第 1 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	43.5	56.0	2.4
2	どちらかといえば当てはまる	45.0	53.0	-0.6
3	どちらかといえば当てはまらない	8.3	48.2	-5.4
4	当てはまらない	2.9	47.4	-6.2

No.	中学校第 2 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	41.3	50.8	2.4
2	どちらかといえば当てはまる	47.3	48.1	-0.3
3	どちらかといえば当てはまらない	8.4	44.5	-4.0
4	当てはまらない	2.8	40.4	-8.0



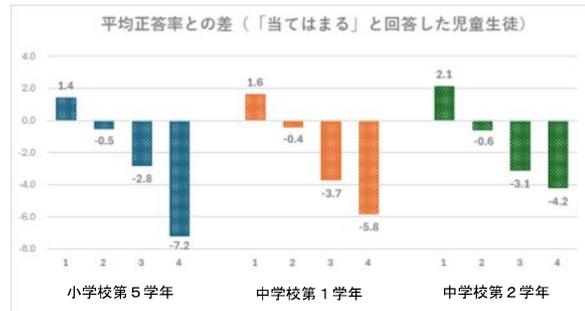
- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

【図 42】 「自己効力（粘り強さ）」と「平均正答率」のクロス集計
【自己効力（粘り強さ）】

No.	小学校第 5 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	48.3	54.4	1.4
2	どちらかといえば当てはまる	41.8	52.5	-0.5
3	どちらかといえば当てはまらない	8.3	50.1	-2.8
4	当てはまらない	1.3	45.8	-7.2

No.	中学校第 1 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	44.7	55.3	1.6
2	どちらかといえば当てはまる	44.2	55.3	-0.4
3	どちらかといえば当てはまらない	9.4	49.9	-3.7
4	当てはまらない	1.5	47.9	-5.8

No.	中学校第 2 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	44.0	50.5	2.1
2	どちらかといえば当てはまる	44.8	47.8	-0.6
3	どちらかといえば当てはまらない	9.4	45.4	-3.1
4	当てはまらない	1.7	44.2	-4.2



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

【図 43】 「自己効力（挑戦心）」と「平均正答率」のクロス集計
【自己効力（挑戦心）】

No.	小学校第 5 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	35.9	52.8	-0.2
2	どちらかといえば当てはまる	43.2	53.6	0.6
3	どちらかといえば当てはまらない	17.0	53.5	0.5
4	当てはまらない	3.7	49.9	-3.0

No.	中学校第 1 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	28.6	52.8	-0.8
2	どちらかといえば当てはまる	44.7	54.1	0.4
3	どちらかといえば当てはまらない	22.1	54.9	1.2
4	当てはまらない	4.4	51.9	-1.8

No.	中学校第 2 学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	27.8	48.5	0.0
2	どちらかといえば当てはまる	45.3	48.8	0.4
3	どちらかといえば当てはまらない	22.1	49.3	0.9
4	当てはまらない	4.7	46.8	-1.6



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

コラム④：自己肯定感を高めるには どのような取組が必要ですか？

令和7年度全国学力・学習状況調査の報告書では、質問項目「自分にはよいところがあると思いますか。」と「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか。」とのクロス集計を行いました。その結果から、自己肯定感の高さは、児童生徒自身が自らのよさを実感する経験に起因している可能性が高いと考えられることが見えてきました。

「自己肯定感」は、自己に対して肯定的な評価を抱いている状態です。自己肯定感は、極めて主観的であり、例えば、自己受容が高くても、挑戦心がなくて自己満足が高い場合や、自己受容が低くても、自分自身を厳しい目で見つめることで自分への満足度は低いが継続的に努力する場合など、いろいろな場合が想定されます。学力との関係を見る場合には、自己受容だけに着目するのではなく、複数の要素を関連付けて分析する必要があります。

そこで、今回、小学5年生の学力調査と児童質問調査の結果をクロス集計し、「自己受容（自分を価値ある存在として認められる感覚）」と、「自己効力感（「自分はこれができるから大丈夫、努力すればできる」といった有能さの面）」の関係性について考察してみました。

〈学力調査結果について〉

【合計正答数（選択式・短答式の4教科合計正答数）】

〈児童質問調査結果について〉

【自己肯定（自己受容）】

質問項目ア 「自分にはよいところがあると思いますか。」

【自己効力（粘り強さ）】

質問項目イ 「自分でやると決めたことは、やりとげるようにしていますか。」

【自己効力（挑戦心）】

質問項目ウ 「難しいことでも、失敗をおそれないで挑戦していますか。」

〈8つのグループ分類〉

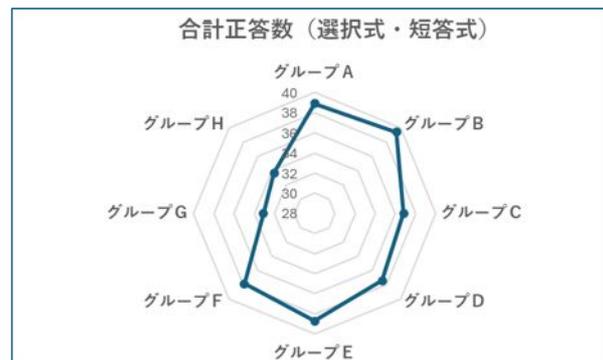
グループ	項目ア	項目イ	項目ウ	備考
A	高い	高い	高い	自己肯定感が総合的に高い
B	高い	高い	低い	自信はあるが、挑戦は慎重
C	高い	低い	高い	挑戦意欲はあるが、継続が課題
D	高い	低い	低い	自己評価は高いが行動に結び付きにくい
E	低い	高い	高い	自己評価は低いが行動力は高い
F	低い	高い	低い	やりきる力はあるが、挑戦に不安
G	低い	低い	高い	挑戦はするが、自信をもった継続に課題
H	低い	低い	低い	自己肯定感が総合的に低い

（高い：「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と回答

低い：「どちらかという当てはまらない」「当てはまらない」と回答）

〈分析結果及び考察〉

	全回答のうち 占める割合（％）	合計正答数
グループA	65.4	38.9
グループB	9.7	39.4
グループC	2.3	36.8
グループD	2.6	37.5
グループE	10.1	38.7
グループF	5.1	37.9
グループG	1.3	33.1
グループH	3.4	33.7



- グループ別の合計正答数を見ると、グループA・BとグループG・Hでは、合計正答数に約6問の差が見られます。自己肯定感に関する項目と学力には関係があることがうかがえます。
- 視点別に見ると、質問項目ア（自己受容）だけで学力は決まらず、行動につながる質問項目イ（粘り強さ）・ウ（挑戦心）の組み合わせが重要であると言えます。質問項目イが高いグループA・B・E・Fの合計正答数はいずれも高く、低いグループG・Hは大きく低下しています。このことから、「粘り強さ、やりとげる力」は学力との関連が強いことがうかがえます。
- 質問項目ウについては、高いグループC・E・Gと、低いグループB・Fともに学力との関係が見られますが、質問項目イほどの大きな影響は受けていません。このことから「挑戦心」だけでは学力向上に直結しにくいと考えます。
- 自己肯定感を高めるためには、継続して取り組んだり挑戦したりする環境を整えることが必要であると考えます。さらに、これらの環境に、児童生徒自身が納得のいくかたちで適応していることを実感できるよう周囲の大人が関わることが重要ではないでしょうか。

Memo

(2) 「自己調整」×「教科正答率」

調査結果のポイント

教科正答率（小学校は4教科合計，中学校は5教科合計）と児童生徒質問調査のクロス集計について

【自己調整（学ぶ意欲）】

質問項目「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに，自分で学び方を考え，工夫することはできていますか。」（図44）

【自己調整（振り返り）】

質問項目「分かった点や分からなかった点を見直し，次の学習につなげることができていますか。」（図45）

【自己調整（家庭学習）】

質問項目「家庭学習では，自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど，計画を立てて活動していますか。」（図46）

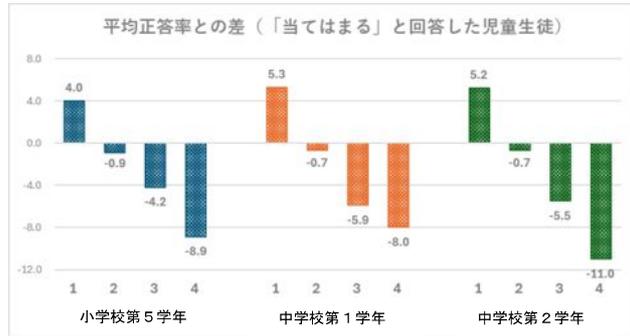
- 三つの項目すべてにおいて，どの学年も，「当てはまる」と回答した児童生徒は平均正答率を上回り，それ以外の群では平均を下回る結果となりました。このことから，分からない点が生じた際に自ら学び方を考え工夫する力は，学年を問わず学習成果を支える重要な要因であると考えられます。
- 自己調整（学ぶ意欲）に関しては，学年が上がるにつれて，「当てはまる」群と「当てはまらない」群との差が拡大しています。これは，学習内容の高度化や学習量の増加に伴い，学び方の工夫の有無が学習成果としてより明確に表れるようになり，その影響が累積的に学力差として表出しているためと考えられます。
- 自己調整（振り返り）に関しては，学年が上がるにつれて，「当てはまる」群の平均正答率の高さと，「当てはまらない」群の平均正答率の低さが顕著に見られました。振り返りの取組の差が学習成果としてより明確に表れていることがうかがえます。二つのクロス集計結果がほぼ同様の傾向を示していることは，「学ぶ意欲」と「振り返り」は学習の中核を形成しており，両者が十分に機能している層のみが，学年が上がっても安定して高い学習成果を上げていることが考えられます。
- 自己調整（家庭学習）に関しては，どの学年も「当てはまる」と回答した児童生徒は平均正答率を上回り，学年が上がるにつれて，「当てはまる」群では平均正答率との差が拡大しています。一方で，「当てはまらない」群については，3学年を通して平均正答率との差がほぼ同程度であり，学年進行に伴う大きな変化は見られません。このことから，家庭学習における計画性の有無は，学力下位層をさらに引き下げる要因というよりも，学力上位層が学年進行とともに学習成果を伸ばしていくための要因として機能している可能性が考えられます。

【図 44】 「自己調整（学ぶ意欲）」と「平均正答率」のクロス集計
【自己調整（学ぶ意欲）】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	36.1	57.0	4.0
2	どちらかといえば当てはまる	45.7	52.1	-0.9
3	どちらかといえば当てはまらない	15.3	48.7	-4.2
4	当てはまらない	2.7	44.1	-8.9

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	32.6	59.0	5.3
2	どちらかといえば当てはまる	47.0	52.9	-0.7
3	どちらかといえば当てはまらない	17.4	47.7	-5.9
4	当てはまらない	2.8	45.7	-8.0

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	33.0	54.1	5.2
2	どちらかといえば当てはまる	46.2	47.7	-0.7
3	どちらかといえば当てはまらない	17.9	42.9	-5.5
4	当てはまらない	2.7	37.4	-11.0



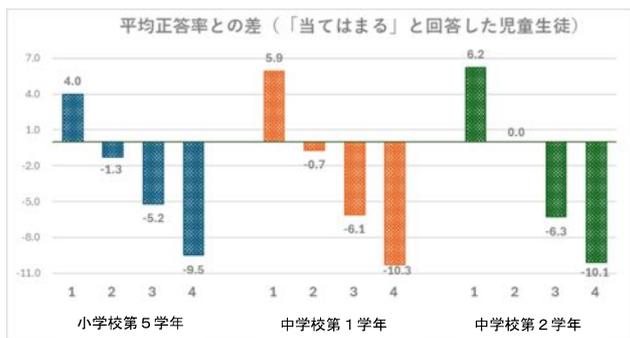
- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

【図 45】 「自己調整（振り返り）」と「平均正答率」のクロス集計
【自己調整（振り返り）】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	40.1	57.0	4.0
2	どちらかといえば当てはまる	44.5	51.7	-1.3
3	どちらかといえば当てはまらない	13.0	47.8	-5.2
4	当てはまらない	2.2	43.5	-9.5

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	31.4	59.5	5.9
2	どちらかといえば当てはまる	47.7	52.9	-0.7
3	どちらかといえば当てはまらない	18.0	47.5	-6.1
4	当てはまらない	2.8	43.3	-10.3

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	29.6	54.6	6.2
2	どちらかといえば当てはまる	47.3	48.4	0.0
3	どちらかといえば当てはまらない	20.0	42.1	-6.3
4	当てはまらない	3.1	38.3	-10.1



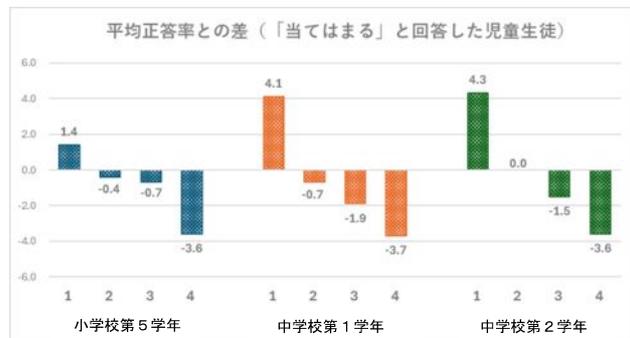
- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

【図 46】 「自己調整（家庭学習）」と「平均正答率」のクロス集計
【自己調整（家庭学習）】

No.	小学校第5学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	39.4	54.4	1.4
2	どちらかといえば当てはまる	38.2	52.5	-0.4
3	どちらかといえば当てはまらない	19.3	52.3	-0.7
4	当てはまらない	2.8	49.4	-3.6

No.	中学校第1学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	28.0	57.8	4.1
2	どちらかといえば当てはまる	38.2	52.9	-0.7
3	どちらかといえば当てはまらない	28.4	51.8	-1.9
4	当てはまらない	5.2	50.0	-3.7

No.	中学校第2学年	割合(%)	正答率(%)	平均正答率との差
1	当てはまる	24.6	52.7	4.3
2	どちらかといえば当てはまる	37.2	48.4	0.0
3	どちらかといえば当てはまらない	30.8	46.9	-1.5
4	当てはまらない	7.3	44.8	-3.6



- 1 当てはまる
- 2 どちらかといえば当てはまる
- 3 どちらかといえば当てはまらない
- 4 当てはまらない

コラム⑤：家庭学習と学校の授業には どのような関係がありますか？

先ほどの図 44～46 から分かるように、自己調整と平均正答率のクロス集計から、「当てはまる」と回答した児童生徒群のみ正答率が平均を上回る結果となりました。このことから、自己調整（学ぶ意欲・振り返り・家庭学習）への意識の高さは、学力と関係があることが見えてきました。

本県では、「家庭学習」の充実をめざして、「家庭学習マイゴールチャレンジ」に取り組んでいます。「学習時間」の確保だけでなく、「何を」「どのように」学習するかをより意識し、学習の質を大切にする取組を推奨しています。家庭学習の取組の充実を図るためには、学校での授業との関わりが大きく影響していると考えています。それぞれの関係を明らかにするためには、家庭学習への意識と授業（学ぶ意欲・振り返り）への意識、学力の状況など、複数の要素を関連付けて分析する必要があります。



【県ホームページより】

そこで、今回、中学校第1学年の学力調査と生徒質問調査の結果をクロス集計し、生徒の「自己調整（学ぶ意欲・振り返り）」と「自己調整（家庭学習）」との関係性について考察してみました。

〈学力調査結果について〉

【合計正答数（選択式・短答式の5教科合計正答数）】

〈生徒質問調査結果について〉

【自己調整（学ぶ意欲）】

質問項目ア「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか。」

【自己調整（振り返り）】

質問項目イ「分かった点や分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか。」

【自己調整（家庭学習）】

質問項目ウ「家庭学習では、自分で学ぶ内容や学び方を決めるなど、計画を立てて活動していますか。」

〈4つのグループ分類〉

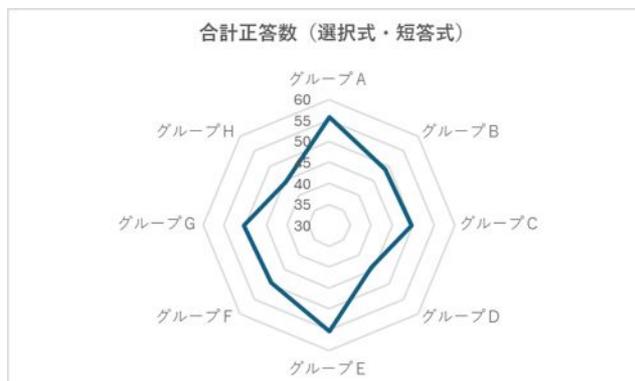
グループ	項目ア	項目イ	項目ウ	備考
A	高い	高い	高い	学びが循環し安定
B	高い	低い	高い	学校・家庭での実行力はあるが改善が弱い
C	低い	高い	高い	見直して成果を補完
D	低い	低い	高い	家庭学習重視・指示された課題で完結
E	高い	高い	低い	学校での学び充実・家庭学習への展開が課題
F	高い	低い	低い	学校での実行力はあるが振り返りが不足
G	低い	高い	低い	振り返りは充実・継続性に課題
H	低い	低い	低い	自己調整力が総合的に弱い

（高い：「当てはまる」「どちらかという当てはまる」と回答

低い：「どちらかという当てはまらない」「当てはまらない」と回答）

〈分析結果及び考察〉

	全回答のうち 占める割合 (%)	合計正答数
グループA	54.6	55.9
グループB	4.3	48.9
グループC	4.9	49.6
グループD	2.9	44.3
グループE	15.4	55.3
グループF	5.6	49.4
グループG	4.7	50.3
グループH	7.8	44.5



- グループ別の合計正答数を見ると、グループA・EとグループD・Hでは、合計正答数に約11問の差が見られました。特に、グループD・Hを見ると、学習成果を最も左右しているのは「意欲×振り返り」であることが分かります。
- 家庭学習の条件に関わらず、グループB・CとグループF・Gでは、B・F（意欲）群よりもC・G（振り返り）群の正答率が高い結果となりました。このことから、振り返りは学ぶ意欲を補完する「安定要因」であり、学ぶ意欲が十分でなくても、振り返りによって学習を修正・調整できる児童生徒は、成果を維持・改善しやすいことを示唆しています。
- 家庭学習は学習成果を左右する単独の要因ではないものの、授業で育成された学ぶ意欲や振り返りの力を日常的に発揮し、学習の質を高い水準で維持・伸長させる上で不可欠な学習場面であることを示唆しています。家庭学習を「量の確保」だけで捉えるのではなく、「学び方を活用する場」として授業と一体的に推進していくことが重要であると言えます。

Memo